

ソースタイン・ヴェブレンの本能論の展開

高橋 宏 幸

1. はじめに

ソースタイン・B・ヴェブレン (Thorstein B. Veblen) は、19世紀末から20世紀初頭のアメリカで、進化論やプラグマティズムなどの成果を積極的に取り入れて「進化論的経済学」(evolutionary economics)を提唱した。この経済学は、既存の正統派経済学とはまったく異なる分析枠組みに基づき展開された。その分析枠組みの中心は、正統派経済学とはまったく異なる「人間性の概念」(the concept of human nature)であった。(高橋, 2005)

制度派経済学は、アラン・G・グルーチャー (Allan G. Gruchy, 1968, 462)によれば、「概して、ソースタイン・ヴェブレンおよびその他の経済学者でも、ヴェブレン流の伝統のもとで研究している者の研究から現れたアメリカの知的産物である。」ヴェブレンの経済学は、とりわけ当時の若手の経済学者を魅了した。ウェズレー・C・ミッチェル (Wesley C. Mitchell), ウォールトン・H・ハミルトン (Walton H. Hamilton), ジョン・M・クラーク (John. M. Clark) は、ヴェブレンの研究に影響を受けた。彼らはヴェブレンが伝統的な経済理論の土台を切り崩していると感じていた (Rutherford, 2000b, 292)。1918年のアメリカ経済学会で提出されたハミルトンの論文は、「制度的アプローチ」(institutional approach)を経済学に適用する必要があることを意図していた (Rutherford, 2003, 360)。1920年の学会では、J. M.

クラークは報告で正統派の経済理論に反対した (Rutherford, 2003, 361)。この時期、このように若手研究者が活発に活動した。このような活動は、次第に勢いを増し一つの運動となり、1920年代には最盛期を迎えた。そこで中心となって活躍したのは、ハミルトン、ミッチェル、クラークであった (Ex., Rutherford 2000b; Hodgson 2004)。

このように制度派経済学はヴェブレンをその創始者として展開していった。しかし、その後の経済学者たちがヴェブレンの経済学を継承したかどうかについての問題は未だに議論されており、これまで数多く論じられてきている (Ex., Rutherford, 1998, 2000a; Takahashi 2008; 齋藤 2008; 佐々野 1982, 2003, 2007, 2008; 塚本 2001)。こうした議論の中でも、しばしば取り上げられるのが、ヴェブレンの本能論がその後どのように継承されたか、あるいはされなかったかという議論である (Gruchy, 1947 [1967]; Hodgson, 2004; Asso and Fiorito, 2004)。例えば、グルーチャー ([1947] 1967, 3)によれば、クラークは、ヴェブレンに直接学んでいるわけではなかったため、ヴェブレンの経済に対する考え方に間接的に影響を受けたにすぎない。これは、ヴェブレン流の考え方が一般に知的環境となっていたことに影響を受けたとしている。さらに、ジェフリー・M・ホジソン (Geoffrey M. Hodgson 2004, 268)によれば、クラークは本能論を何度か取り上げてはいるものの、最終的にはそれにはほとんど注意を払わなかった。ミッチェルは、大学院時代にヴェブレン

に直接に学んでいる。それゆえ、ヴェブレンの本能論を一度は採用しようとする (Hodgson, 2004, 268)。しかし、ミッチェルも、グルーチャーが述べているように、「ヴェブレンとは違って、ミッチェルは人間性を分析するさい理論的ではなく経験的である。ヴェブレンの本能心理学をほとんど用いず、ジョン・B・ワトソン (John B. Watson) の心理学のより行動主義的な見解を採用する。」 (Gruchy, [1947] 1967, 255)。かくして、ミッチェルはヴェブレンの人間性の概念の分析方法を思弁的であると批判してさえもいる¹⁾。

このようなことから、ヴェブレン経済学の位置、およびその後の世代の制度経済学におけるその位置が不明瞭であると指摘されている。たとえば、スタンレー・H・ドゥガート (Stanley H. Dugart, 1950, 1) は、「ヴェブレンの位置と『制度主義』や『制度派経済学』の関係に関する議論で意見が一致しないのは、例外ではなく、原則である」とまで述べている。

このようにみえてくると、ヴェブレンの経済学の影響力は大きかったが、彼の経済学がどのように継承されていったのかという問題については不明瞭なままであるところが多いように思われる。しかもその問題の一つは、ヴェブレンの本能論をめぐるものであるといえよう。

さて、1940年代になると、自己を「ヴェブレン主義者」であると主張するクラレンス・E・エアーズ (Clarence E. Ayers) が現れた²⁾。そのさいエアーズは、ヴェブレンが提示する人間行為の対立概念は有効であることを評価する。しかし、ヴェブレンが人間行為の解釈をすべて本能概念に帰したことを批判する³⁾。こうしてヴェブレンの本能論を用いずにエアーズが提示するのは、「技術的行動」と「儀式的行動」という文化レベルでの対立概念としての人間行動である。これは人間行動を二元的に捉えたものである。こうしてエアーズは、二分法 (dichotomy) を自己が展開する制度経済学の基礎とした⁴⁾。エアーズの他にも、たとえば、グルーチャーもヴェブレン経済学の基礎

はこの二分法にあるとしている (Gruchy, [1947] 1967, 120)。

かくしてエアーズによりヴェブレン経済学が再解釈され、その二分法に基づく分析方法が広まっていった。この二分法による解釈は、その後、ジョン・F・フォスター (Jhon F. Foster) やポール・D・ブッシュ (Paul D. Bush)⁵⁾ に受け継がれている。ウィリアム・T・ウォラー 2世 (William T. Waller Jr., 1982) は、ヴェブレンからはじまり、ハミルトン、エアーズ、そしてフォスターらの制度分析が二分法に基づいているという点で共通していると議論している。

1980年代後半ともなると、1960年代ごろから現れてきた新制度派経済学 (New Institutional Economics) と区別して、ウィリアム・ダガー (William Dugger) らのラディカル制度主義 (Radical Institutionalism) も登場した。ダガーは、自己の制度分析概念の基礎が二分法にあるとした (Dugger, 1988)。これは、「エアーズは制度派の思想でのヴェブレン流派の分析に基準を与えた」というダガーによるエアーズの評価に基づいており、ダガーはその分析方法を「ポスト・エアーズ流、ヴェブレン流の伝統」 (Dugger, 1995, 1) と呼んだ。

こうしたことから、ヴェブレンの経済学を取り上げた研究およびその後のエアーズ流の伝統に基づく分析方法が次々と現れて議論されている。ここでは、ヴェブレン経済学を、ヴェブレンが主張したような本能論には基礎を置かず、その代りに二分法による制度の対立概念を重視する。ヴェブレン経済学を二分法によって解釈するという点で統一性があるとされてもいる。とすれば、ヴェブレン経済学は、この二分法を用いた分析方法による制度経済学として統一されているといえるのだろうか。

ところで、こうした二分法とは異なり、ヴェブレン経済学の製作本能による一元的解釈を展開したのが、佐々木 (1967) 氏である。氏は、ヴェブレン経済学を製作本能で一元的に捉えることがで

きるとしている。

さらに、1980年代後半に現れ、ヴェブレン経済学を評価するホジソンも、ヴェブレンの二分法解釈に疑問を呈して、次のように述べている。「われわれが批判的であらなければならないことがある。それは、ヴェブレンの考えについての長年続いているいくつかの解釈である。たとえば、…ヴェブレンが制度と技術の相互間での『ヴェブレン二分法』を展開していたという考えである。」(Hodgson, 2007a, 336) こうしてホジソン(1988, 2004)は、ヴェブレンの本能論について再評価し直し、その考えに基づいてヴェブレン経済学の再解釈を展開している。

さらには、齋藤(2007)氏も、ヴェブレンは製作本能の見地から一元的に捉えられるとしている。氏によれば、ヴェブレンの著作では対立概念を詳述していく傾向が次第に論文ごとに強められ、ともするとそれが原因となって研究者たちがヴェブレンの思想体系を二分法で捉えられる、あるいは二元的に捉えるようになってしまう傾向がある。そして、その傾向が一般的になってきている。こうしたヴェブレン経済学の二分法を用いた解釈が行われているという現状に対して氏は、ヴェブレンが製作本能を一元的に展開していることを論じ、ヴェブレン経済学の二元的理解には再考を要するとしている。

こうみえてくと、ヴェブレン経済学の本能論をめぐる解釈に関して混乱が存在するように思われる。これもヴェブレンが本能論を体系的に提示していないからであるとも考えられる。

こうした点からも、ヴェブレンの本能論を彼自身の言葉により再検討してみる必要があるように思われる。そこで本稿では、ヴェブレン自身が本能論について直接議論している『製作本能論』(Veblen, 1914)を取り上げることとする。この著作は、全部で7章から構成されている。その中でも、第1章「緒論」および第2章「原始的技術における本能の汚染」(Ibid., 1-102, 訳3-87)は、ヴェブレンが本能論について詳しく議論している

章である。この後の第三章以降は、この二つの章で論じた本能論が各文化段階において実際どのように展開していくのかをより具体的に議論している個所である。したがって、第1章と2章は『製作本能論』の中でも、彼の本能論の基本的特性について議論されているところであるとともに、彼の本能論の核心部分となっているところであると考えられる。それゆえ本稿では、『製作本能論』の第1章および第2章での議論を中心に取り上げることとする。

昨今、制度や進化を重視する経済学が評価を受けるなか、ヴェブレン経済学が再び注目されている。その中でも、ヴェブレンの本能論について取り上げるものもある。そこでは、現代心理学の立場からヴェブレン経済学を再解釈していこうという試みもある(Ex., Cordes 2005; Hodgson 2007a, 2007b; Twomey 1998)。こうした状況下で、ヴェブレン経済学でもとくに彼の本能論を取り上げて議論することは現代的な意義があるといえよう。そこで本稿では、ヴェブレンの本能論が製作本能によって一元的に捉えられることを明らかにし、そのことが新しいヴェブレン経済学像を構築していくための鍵となるのではないかとすることを示したい。

では、順次、ヴェブレンの議論を検討していくことにしよう。

2. 本能の概念

2.1 本能と向性

まず、ヴェブレンが論じる本能について、それがどのような特徴を有しているのか順次みていくことにしよう。

ヴェブレンは、『製作本能論』の第一章「緒論」で、制度の成長と性質についての研究には、「本能」という概念を用いるのが有効であるという(Veblen, 1914, 2, 訳4)。しかし、彼によれば、この本能は、とくに生理学、心理学の分野では役に立たない分析用具であるとみなされている。というのも、本能は、そうした分野ではより厳密な構

成要素にまで分解して分析されるようになってい
るからである。それゆえ、厳密な研究を追求する
ためにはあまりにも広い意味を有している本能と
いう概念は不明確すぎるのである。

しかしヴェブレンは、自己が取り組む「物質的
環境と人間の生得で持続的な性向とによって規定
されている習慣や因襲の成長」、つまり「制度の
成長の性質と原因に関する研究と徹底的な心理学
的分析が必要とするものは厳密には同じではない」
(*Ibid.*, 2, 訳4)⁶⁾と主張する。というのも、ヴェ
ブレンは、本能が生理学等が示しているような機
械的観点で、定義されたり規定されたりしてはな
らないと考えるからである (*Ibid.*, 3, 訳5)。こ
う考える理由は、最近の生理学や心理学の研究にお
ける一般的な評価に照らして考えると、社会科学
の分野では人間行為に関するそれ以上還元不可能
な心理学的要素が、複数の要素で構成されかつ機
能的な種類に分かれており、それゆえにそうした
心理学的要素が、人間性に関する還元不可能な要
素として特定の性向や性癖を組み立てていること
は明らかだからである。こうして形成された人間
の心理学的要素である関心や性向こそが、低級な
動物から人間を決定的に区別するものでもある
(*Ibid.*, 3, 訳4.5)。

こうして、ヴェブレンは自己の考える本能を次
のように述べる。本能の「顕著な特徴は、その点
で所与の本能も識別される点となるが、それが見
出されるのは、目的という特性である。その目的
を本能は追うのである。『本能』は、向性的な活
動 (tropismatic action) とは区別されるような、
意識および目指す目的に適合するということを
伴っている。」(*Ibid.*, 4, 訳5) このようにヴェブ
レンは、本能には目的論的特性があり、それは生
理学や心理学が示しているような刺激-反応とい
う自動反応を想定した「向性」(tropism) とは区
別して考えられなければならないと主張する。

ところが「緒論」の冒頭では、「人間行動は本
能的性癖 (instinctive proclivities) と向性的傾向
(tropismatic aptitudes) の総体が決定する」(*Ibid.*, 1,

訳1)とも述べている。というのも、人間を含む
動物の行為では向性的活動と本能とを区別するこ
とはひじょうに難しい問題であるとヴェブレン自
身認めてはいたからである。しかし、「言うまで
もないが、このように詳細に『本能』の定義を提
示したり定めたりする意図はない。そうではなく
て、ここで意図しているのは、本書で用いられる
用語にいかなる意味を与えているかをできるだけ
詳しく示すことである」(*Ibid.*, 4, 訳7)と述べて、
結局「『本能』とは、…当の本能が価値あるもの
とする客観的目的を自覚的に追求することを意味
している」(*Ibid.*, 5, 訳6)と主張した。

かくしてヴェブレンは、「本能」を刺激にたい
する機械的反応を想定する心理学や生理学的研究
で示されているような「向性」から区別した。同
時に、その本能がなんらかの目的を持ってそれを
自覚的に追求するという意味で、目的論的性向を
有したものであることを示した。

以上のような本能に関する生理学の機械的分析
から自己が述べる本能を区別した後、ヴェブレン
は本能の数とその機能の範囲と内容に関する議論
に移る。以下ではそれらをみていくことにしよ
う。

2.2 本能の機能

ヴェブレンは、これまでの研究では、本能の数、
機能の範囲と内容に関する統一の見解はまったく
なく、認められているのは、本能がそれ自体、人
間性の個別的で特定の構成要素としての機能内
容 (functional content) を組み立てていると考え
られてきたことであるとみる。ヴェブレンは、こ
の点、すなわち生理学の分野で本能と向性が同一
視されている点を指摘しそれに反対する。しか
し、生理学では、本能的感覚が関係している内臓
器官や有機体的刺激が一つ以上であるのが常であ
ることが明らかにされている。このことからわか
るのは、本能が複雑に絡み合っただけで機能して
いることである。こうしてヴェブレンは、本能が個
別的に機能するのではなく総体として機能すること

見出した (*Ibid.*, 8-11, 訳 9-12).

ヴェブレンは、こうした生理学の批判的検討を通じて、自己が説明する本能の特徴について続けて説明する。「制度の成長の中で、それらの〔本能的性癖の〕働きの範囲と方法に関する研究にとって、さらに適切であると思えることは、どのようにかつどのような結果を伴って、いくつかの本能的性癖が互いに組み合わせたり、一体となり、重なり、中和し、強化するかに注目することである。」(*Ibid.*, 8-9, 訳 9)。さらに、ヴェブレンは、次のように指摘する。本能的性癖は「包括的にかつ入り組んで、相互に関連し互いに頼り合うという複雑に絡み合って結合し、また、間断なく相互に汚染しあったり相殺しあったり強め合ったりして、…それらの間に厳密で確固とした境界線を引くことはほとんどできない。」(*Ibid.*, 11-2, 訳 11)。このように各本能は、さまざまな形で関係し合いながら総体として機能する。その結果、「人間性」を形成することになる。

ヴェブレンは続けて本能と習慣の関係について説明する。ヴェブレンによれば、こういった生理学的研究が示すように、感覚器官という共通の基礎に基づいて機能するということは、習慣がどのように働くかに重大な影響をもたらす。本能の機能は生理学的組織にいくぶんかは関係している。それゆえ、ある本能の機能は様々な程度であるが他の本能の機能と結びついている。こうした生理学的な根拠からだけでも、ある本能の機能に関わる慣化 (*habituation*) は、他の本能によって駆り立てられた習慣的行為に影響するはずである。それゆえ、習慣は慣化に基づいた特定の本能的行為をこえて作用する (*Ibid.*, 11, 訳 12)。

このように、ヴェブレンによれば、本能は目的を与えて本能的行為となるが、その行為が遂行されるさいに習慣が重要な役割を果たす。このとき本能は行為を決定するのではなくて行為が状況に対して適合できるように開かれた場を与える。そこに習慣が作用し、そして今度はその場で、反省、分別、熟考等が役割を果たす (*Ibid.*, 38, 訳 34)。

このように、「本能的行為は展開のもとにあるのが常であり、したがってまた、習慣による変更にさらされている。」(*Ibid.*, 38, 訳 34)。

さらに、ヴェブレンによれば、こうした「本能は遺伝形質である。」(*Ibid.*, 13, 訳 12)。それゆえ、変化することなくその特性は受け継がれる。ヴェブレンは、彼の時代に受け入れられていた遺伝理論では本能が生理学的見地から副産物にすぎないとされていることを批判して、G. J. メンデル (G. J. Mendel) が示すように、本能はその形質を遺伝的に継承すると主張する⁷⁾。

以上のように、ヴェブレンは本能の特性について論じた。そこでは、本能と習慣の関係から本能的行為についても論じられている。では、本能的行為は実際にどのように成立していくか。節を改めてヴェブレンの議論をみていくことにしよう。

2.3 本能的行為と制度

ヴェブレンによれば、本能は目的を与えるが、その本能が価値あるものと定めた目的を実際になし遂げる方法や手段は、知性 (*intelligence*) に関わることである (*Ibid.*, 6-7, 訳 7)。だからといって、本能が重要でなくなるわけではない。本能は、方法と手段たる知性を監視する。その監視のもとでのみ、知性は機能する (*Ibid.*, 30, f. n., 訳 33)。したがって、実際には本能が行為の方向づけをする。「この本能と知性の結びつきが本能的行動のある程度知的にする」(*Ibid.*, 31, 訳 25) のはこのためである。

さて、本能が与える目的を実現する手段と方法は、外部環境に求めなければならない。前節で論じたように、一度得た手段と方法は慣化が作用し、一定の思考と行動を生む。これは時間が経過するにつれて、社会で認められるようになり制度になる。この意味で、知性たる目的達成のための方法と手段は、「過去の世代を通じて蓄積されてきた思考習慣の遺産」となる (*Ibid.*, 7, 訳 7)。こうして制度にまでなり定着した方法と手段は、今度は行為の目的となる。こうして本来の目的は失

われてしまい、制度に規定された目的が次の行為の目標となる。ヴェブレンはこれに関して次のように述べる。

慣化という訓練のもとで、こうした方法と手段という論理と装置は、慣習的にまとまり、慣習および規範と調和する。それゆえ制度的特徴と力を帯びる。慣習化した様式で何をなすか、どう考えるかは、習慣的に当然のこととなり、簡単かつわかりきったこととなり、同じような仕方、社会での慣行が認めるようになる。したがって、正しくかつしかるべきものとなり、行動の原則を生む。使用して慣習化することで、現行の常識体系に入り込む。是認された行為と営みの体系にかかわる要素として、そうした慣習的な方法と手段は、努力に関する目の前の目的の地位を占める。そこから、絶え間ない慣化がさらに進み、注意が習慣的にそうした目の前の目的に集中するにつれて、慣習的な方法と手段は、注意を独占する。そのため、普通、自己の隠された目的を背後に追いやり、見失ったままとなるのがほとんどである (Veblen, *Ibid.*, 7-8 訳 8)。

以上のようにヴェブレンは、本能からはじまり制度が形成され、今度はその制度が行為を規定していくという過程を論じている。

こうして次にヴェブレンは、具体的にどのような本能が人間にとって重要であるかについて分析していく。そこで章を改めて、ヴェブレンが実際にどのような本能を重視していたかを見ていくことにしよう。

3. 三つの本能

3.1 三つの本能

ヴェブレンは、製作本能 (instinct of workmanship)、親の性癖 (parental bent)、根拠のない好奇心 (idle curiosity) を重要な本能として取り上げている⁸⁾。では、順次これらの本能についてみて

いくことにしよう。

まず、製作本能はどのようなものか。ヴェブレンによれば、「…製作本能が関わるのは、役に立つ便法、方法と手段、効率と節約に関する工夫と考案、熟練、創造的な仕事、そして事実に関する技術的な熟練である。」(*Ibid.*, 33, 訳 28)。この意味で製作本能は、人類の物的福利に直接貢献する本能である。製作本能は、技術的知識の範囲やその拡大、産業技術の状態にきわめて重要な影響を及ぼす。しかし、このことは、製作本能が物的福祉に貢献するような方法や手段を固有の目的としているという意味ではない。製作本能は、「通常、したがって普通は、それ自体、独立しており創造的な目的に向かって働くのではなくて、むしろ、方法と手段に関わっている。それらの方法や手段に従って、本能的に、与えられた目的が達成されることになる。」(*Ibid.*, 34-5, 訳 29)。つまり、製作本能は、他の本能が決定し価値づけした目的を遂行する「方法や手段」に関する本能である。言わば、目的を達成するという目的をもった本能である。この意味で、他の本能との関係では、製作本能は補助的な本能ともいえるが、それゆえにこそ、製作本能の「働きとは交差せず、それに影響されない一連の本能的性癖はほとんどない。」(*Ibid.*, 31, 訳 26)。

では、目的達成の方法と手段を助けることに関わるこの製作本能は、それ自体では、どのような性癖を有しているのか。ヴェブレンはこれを『有閑階級の理論』(Veblen, [1899] 1965) の中で次のように述べているので、ここでみてみることにしよう。

淘汰的必然のこととして、人間が主体である。人間の理解では、展開しゆく衝動的な活動——「目的論的」活動——の中心はあくまでも人間である。人間はあらゆる行為規範のなかに、なんらかの具体的で客観的な、さらには、一般的な目的の達成を望むような主体である。このような主体であるということにより、人間

は効果的な仕事に対する愛好と、無駄な努力に対する嫌悪をもつようになる。人間は有用性や効率性を高く評価し、不毛性、浪費すなわち無能さを低く評価する、という感覚をもっている。この習性あるいは性向は製作本能と呼ぶことができよう。生活の環境や伝統が能率をめぐって人と人とを比較するという習慣をもたらすようなところではどこでも、製作本能は、結局、人と人との間の競争的な、あるいは妬みを起こさせるような比較をもたらすことになる（Veblen, [1899] 1965, 15, 小原訳 22, 高訳 26）。

このことからわかるように、製作本能の指導のもとでは、有用性と効率性が好まれ無駄、浪費、無能さが低く評価される。それゆえ、有用で効率的な行為が好ましいものとなる。これは、有用性と効率性をめぐる基準を生み出すことにもなる。すると他人との比較をもたらすことにも繋がり、競争心の原因ともなる。これは主体を取り囲む外部の環境次第である。

これまでみてきたことから、製作本能は、何らかの特定の目的ではなくて、本能的行為の目的達成のための方法と手段を効率的に行わせることに関する本能である。こうした性癖を有する製作本能に関してヴェブレンは、前章でみたように、心理学や生理学が扱う向性と区別して用いていることと、製作本能が遺伝的性質を有していることを再度確認している⁹⁾。

さて、親の性癖は、ヴェブレンによれば、製作本能と密接に関係している。このため、いずれか一方を論じる場合には不可避的にもう一方を問題にしなければならないというように、それら二つの本能を区別するのは、非常に難しい。親の性癖は、「親らしい心遣い」という言葉で表現されるように、子供を思いやりその将来について無条件に尽くすことに関わっている。その点で「公益のための節約と効率を求める意図」を持ち、このため「節約と効率を心情的に好ましく思い、そして浪費的で役に立たない生活を好ましくない」とす

る。これは、長期的に、「社会全体の生活ととりわけ社会の将来の福利」に関わっている（Veblen, 1914, 26-7, 訳 23-4）。

製作本能と親の性癖の他に、ヴェブレンが重視しているもう一つの本能は、根拠のない好奇心である。この本能の特性について見ていくことにしよう。

ヴェブレンによれば、根拠のない好奇心とは「より重大な関心が彼らの注意を奪っていない時に、人間が多かれ少なかれしつこく、事物を知ろうと望む」（*Ibid.*, 85, 訳 69）本能である。根拠はないが事物を知ろうとする性向を有するのがこの本能であるが、その「根拠のない」（idle）という用語をヴェブレンは、1918年の『アメリカにおける高等教育』（Veblen, [1918] 2003）でより詳しく述べているのでここでみてみることにしよう。

人間は、本能的に知識を探究し、そしてそれを尊重する。この性癖に関する事実は、人間は生まれつきの才能により根拠のない好奇心と共に行動を駆り立てられる、と述べることでうまく要約できる。「根拠のない」とは、獲得した知識を今後使用することとは区別して、事物に関する知識が探究されるという意味で、「根拠のない」ということである。もちろん、これは、獲得された知識が実際の価値に向けられるであろうということの意味しているのではない（Veblen, [1918] 2003, 4）。

このように、「根拠のない」とは、何かに使用するとか何かに役立つだとかというのではなく、ただひたすら「知りたい」と望む特性を有しているという意味である。この本能は、一方で人間がそれ自体人間に根本的に備わっているものであり環境から圧力がかけられていないようなときに発現する。他方で基本的な事柄に迫られて行動するさいにはその発現が抑制されるもする。しかもこの本能が自由に発現しうる状況ですら、発現しないときさえもある。偶発的に発現するのである。こ

の点は製作本能と共通している。こういった特徴のある根拠のない好奇心ではあるが、その働きは、人類の文化にとって長期的にはきわめて重大な影響力を有している。なぜなら、人間の生活とその発展にかかわる事実即した知識や情報を、必然的にとはいえないまでももたらしうるし、その結果、技術発展が促されることにもなる可能性を大いに有しているからである (Veblen, 1914, 84-88, 訳 68-71)。

これまで、ヴェブレンが重視する本能の特性についてみてきたが、これらの本能は互いに、同時発生あるいは汚染しあい総体として機能している。そえゆえに、それぞれの本能の発現が促進されたり妨げられたりする。そこで、次にそうした本能の同時発生と汚染がどのように行われるのかを見ていくことにしよう。

3.2 本能の同時発生と汚染

ヴェブレンによれば、親の性癖は人類の子孫繁栄について考慮し、物的福利や技術発展のために節約したり効率性を促したりする。それゆえ、社会の将来に関わる特性を有している。この点、親の性癖と製作本能は同時発生している。しかし、親の性癖が製作本能を汚染する場合がある。その本来の性癖が妨げられるような略奪的性格が支配的な環境のもとでは、親の性癖によって導かれた「支配階級の特権と信ずべき慣習の原理が、現存する真理と正義の基準となり、やがて製作的な効率性と集団の生活の豊かさの上に立つようになる。結果、…大抵の場合、技術的な洞察に役に立つ事実即した事柄を不明瞭にすることで製作にかかわる効率性を妨害する。」(Ibid., 47-8, 訳 40)。こうして親の性癖が製作本能を汚染する。「しかし、……親の性癖はその生来的で自然な特徴により絶えず自己主張してくる。それは、若い人々の福利と集団の将来の繁栄のために、回復しては繰り返して配慮することによって自己主張する。それ自体、変わることなく出現する。それは製作本能を補強するためであり、生活の方法と手段におけ

る効率を直接的に追求する関心を維持するためである。親の性癖と製作本能は、こうした効率を探究するさい、強く密接に結び付き同時発生する。それゆえ、通常、判断するのに難しくなるのは、ある所与の一連の行為で二つのうちどちらが大きくなるかあるいは指導的な役割を演じているとすべきかどうかである。」(Ibid., 48, 訳 40-1)。このように、これら二つの本能は同時発生したり、汚染したりするのである。

では、製作本能と根拠のない好奇心の関係はどうか。ヴェブレンによれば、「製作は利用できるものはなんでも利用する。すでに指摘した方法で、このように確かめられた『事実』を用いることは、人間が持っている休むことのない好奇心を通じて手元に入った情報が、ほとんどあるいはすべて、製作本能という規範のもとで、体系的に形作ることに移されることで促進されるし妨害されるし。」(Ibid., 88, 訳 71)。これは、根拠のない好奇心が得た事実即した知識や情報を加える役割を果たす点で製作本能を支えていると考えられる。しかし、ヴェブレンによれば、これと同時に製作本能が根拠のない好奇心を汚染していることにもなるという。ではなぜ、もたらされた情報を製作本能が体系的に形作ると根拠のない好奇心がもたらす知識や情報を汚染することになるのか。これに関して、続けてヴェブレンは次のように述べている。

このこと〔製作の規範のもとで情報が体系的に形作ること〕が意味しているのは、観察された事実に関するそのままの素材を、想像して目的論的に事物を整理するという方向にそって、あたかも人が演じているような仕方を投入し、選択的に、手を加え、結び付けて、蓄積することである (Ibid., 88, 訳 71)。

ヴェブレンが説明するように、製作本能のもとで情報が組み立てられると、人はその情報に関してあたかも人間が演じているような仕方で想像す

る。これは、事物を目的論的観点から整理していくことである。

では、なぜ製作本能のもとでは事物を目的論的な観点から整理するようになるのか。しかも、これがなぜ結果的に製作本能の発現の妨害となるのか。ヴェブレンによれば、その理由は製作本能の自己汚染（self-contamination）にあり、しかも、根拠のない好奇心と製作本能の汚染関係もこの問題に密接に関係しているという。そこで次に、この製作本能の自己汚染についてのヴェブレンの議論をみていくことにしよう。

4. 製作本能の展開

4.1 製作本能の自己汚染

製作本能の自己汚染についてヴェブレンは次のように述べている。「製作に付きまとうもっとも妨害的な攪乱は、いわゆる製作の感覚それ自身の自己汚染というものであろう。このことが特に当てはまるのは、早期のあるいはそれよりもさらに初歩の文化段階である。しかし、このことは、後に文明が成長してもずっと、その力は弱まっていくものの、当てはまる。…この妨害は、擬人論（anthropomorphism）、あるいは、それに比べ古風な形態にすぎないアニミズム（animism）と言われてきたものである。」（*Ibid.*, 52, 訳 43-4）。こうした、「擬人論的な概念が有する本質的な特徴は、当面の議論に関するかぎり、事実上完全に、人間の行為様式に倣った行為を外部の対象に転嫁することである。」（*Ibid.*, 52, 訳 44）。

では、こうしたことがなぜ起こるのか。ヴェブレンは、アニミズムや擬人論が特に当てはまる「早期のあるいはそれよりもさらに初歩の文化段階」（*Ibid.*, 52, 訳 43）、つまり原始未開段階でのそれらの展開について説明している。そこでまず、ヴェブレンが『有閑階級の理論』（Veblen, [1899] 1965）で外部の対象を人間行為に擬えることになる理由を述べているので、ここでみてみることにしよう。

人間は自己でなお理解できないような現象を前にすると、それをすでに身につけている用語—自己の活動を意識すればすぐに与えられる用語—のみを用いて解釈する。それゆえ活動は、人間の行為に擬えられ、活動的な事物は、そのかぎりで人間主体に擬えられることになる。」（Veblen, [1899] 1965, 12, 小原訳 19 / 高訳 22-3）。

このように、人間は理解できない事物を解釈するさい、活動を自己の活動、つまり行為に倣えて考える。こうした擬人論やアニミズムとは、人間の行為を事物や現象に転嫁することであるが、ヴェブレンによれば、その転嫁の役割を演じているのは本能である。ヴェブレンは次のように述べる。

人間はすべて、本能に導かれて習慣的に行動する。それゆえ何ものかに向かおうとする力によって本能的に、あらゆる活動の中になんらかの目的を期待する。したがって、原始時代、仕事をする人が関係する対象物も、本能的な性質という衝動のもとで活動するものと理解される（Veblen, 1914, 54, 訳 45）。

このように人間は、目的論的性向を有した本能の役割により、事物を擬人論的に解釈する。それはとくに、活動的な事物に転嫁される。

では、製作本能の事物の理解に対するヴェブレンのさらに詳しい議論を追ってみることにしよう。

事物を製作本能の観点で理解すると、事物は、事実即ち事柄（matter of fact）と、転嫁に関わる事柄（matter of imputation）についての二重の理解となる。これら「事実即ち事柄と転嫁に関わる事柄は、一体となって結びつつ、境界線を越えてわずかながらはっきりと干渉して、一緒になっている。」（*Ibid.*, 56-7, 訳 47）。つまり、観察した事物は同一だが、そこには二重の理解が同時に存在している。しかし、それらの「理解、あ

このように、ここでみられるのは、事物は明らかに製作本能によって、互いに矛盾する二重の理解をもつものとされ、そして同時に、外部環境から取り入れられた事実即した知識や情報によってその対立関係の程度が変化していく仕方である。この事物の認識過程と、情報という外部環境との相互作用が作り出す二重の理解間の調整過程は、すべて製作本能が機能することによってなされていることが示されている。そして、時を経るにつれて事物における擬人論的解釈が洗練され神話という思考習慣、つまり制度が形成されていく過程が論じられている。

では、制度にまでなった神話はそのまま人間の行為を規定し続けるのか。そうではない。ヴェブレンによれば、事物を擬人論的に転嫁することは事実を理解することすべてに及ぶことは決してない。それゆえ、どれだけ擬人論的に事物を理解したとしても、不明瞭な事実即した性質に関する事柄が残る。そこに製作的性癖、つまり純粋な製作本能の性癖が転嫁される。すると、事物は主体として製作的な事柄に関わることになる。このように、「製作はありのままの素材と関係している。そして、このありのままの素材が製作の働きにより事物がもつ目的に受動的に適するようになるという点で、事物それ自体が自己の創意に基づき能動的に自己の目的を探究しているとは考えられない。それゆえに、製作の論理により、製作的であるような（アニミスティックな）性癖を手を加えていない事実即した事柄を一般に思われているような製作的であるような主体（the putative workmanlike agent）と相互に関係があるものとして仮定することを含んでいるのである。したがって、原始未開の製作に携わる者が擬人論的に創造することは、現象を目的論的に解釈することを究極的な状態（a finality）にまで持つていくことは決してできない。それゆえに、原始未開人が理解するさい、そこには事実に関する事柄という生気のないものが残るのが常であろう。…こ

うしたありのままの事実即した事柄が成長して、経験と整合性を増して、擬人論的に解釈することにより誇張されず装飾もされていないような価値あるものを、引き続き製作する者の手中に準備するのが常である。」(Ibid., 60-1, 訳 51)。

ヴェブレンはこのように、事物はどんなに擬人論的に解釈されても、そこには同時に不明瞭な事実即した事柄が常に残存することを論じている。ここに技術進歩の余地が残されている。しかもこのことは、「一般に思われているような製作的な主体」という純粋に発現した製作本能による事物の理解によって導かれていることを示している。

以上のような検討から、製作本能は矛盾する二重の理解を事物について行うだけでなく、一つの事物の中でそれら二つの矛盾する理解を常に統一させるように働いている。そして、統一されるように働くと、同時に製作本能の機能によって矛盾した理解が再び現れる。こうした認識過程において製作本能は、矛盾を発生させては統一し、それとともにまた矛盾を発生させるという過程を繰り返し行う基体となっている。事物や現象は常に一つであり、その中で製作本能による矛盾した二重の理解が同時に存在している。ヴェブレンは、こうした製作本能による認識活動の議論に基づいて、神話などの制度が形成されていく過程を論じている。

5. ヴェブレンの本能論の展開

では、これまでの議論の骨子をまとめてみよう。

ヴェブレンによれば、本能という概念は生理学の分野では時代遅れとなっている。厳密性に欠けるからである。だが、制度の成長と性質と原因に関する研究に用いる本能は、社会科学の対象とする人間行為が結局それ以上は還元不可能な心理学的要素たる関心や性向に分類されることを考えれば、生理学の分野における機械的な向性から本能が区別されなければならない。こうして本能が有

する関心や性向というものが問題となる。それは、本能が自覚的に目的を追及する特徴にある。これにより本能は、目的論的性向を有しており、行為に目的を与えるものとなる。

ヴェブレンによれば、生理学では本能の数や機能の範囲に統一の見解はないが、これらの研究が示すのは、本能が総体として機能することである。それゆえ、本能は組み合わせざったり中和されたり、互いに汚染しあったりする。

ヴェブレンはこのように心理学や生理学の分野で扱われている向性から本能を区別して、彼独自の本能の概念を見出した。

ヴェブレンによれば、こうした本能は遺伝形質である。それゆえに、その特性は遺伝的に受け継がれる。結果として、本能の特性は変わることがない。

このような特性を有した本能は、ヴェブレンによれば、自己の持つ性質上目的を提示する。この目的を実際に成し遂げるのは方法と手段であり、知性の問題である。この知性たる方法と手段は、過去の伝統や経験が蓄積した思考習慣である。この点で、本能は習慣に影響を受ける。本能は行為を決定せず、状況に対して行為が適合できるようにするので、目的は行為となるさい思考習慣に照らして実行されることになる。しかもここで知性は本能に監視されて機能する。それゆえ、本能的行為は知的である。こうして思考習慣に照らして形成された行為は、やがて社会で認められる思考習慣、つまり制度となる。この制度が今度は人間行為を規定するようになり、そこで示されている方法と手段が目的となる。このように本能的行為は、制度との相互作用で実現される。

そこでヴェブレンが具体的に取り上げ重視する本能は、製作本能、親の性癖、根拠のない好奇心である。これらの本能は同時発生したり汚染したりする。

製作本能は、効率性と有益性を好み無駄と浪費を嫌うという性癖を持ち、何かをなし遂げるための方法と手段に関わる本能である。それゆえ製作

本能は、他の本能を助け、効率性と有益性の観点から、本能によって示された目的を導く。

親の性癖は子孫繁栄と社会全体の将来を思う本能であり、効率と節約を好む。この本能は、人類の物的福利の発展に直接貢献する。製作本能と同時に発生する場合、その効果が高いものとなる。しかし、長老政治のような社会全体にさほど有益ではない制度を形成するところでは、技術的洞察に役立つ事実在即した事柄を不明瞭にし、製作本能を汚染する。

根拠のない好奇心は、物事を純粹に知りたいと望む本能である。発揮されると効率性や有益性に関する情報を与える契機となり、製作本能を支える。しかし、製作本能と同時に発生すると汚染される場合もある。これは製作本能の自己汚染に関わる問題である。

ヴェブレンによれば、製作本能の自己汚染は擬人論やアニミズムと呼ばれるものである。これは、事物や現象を、人間行為に擬えて解釈することである。それは、目的論的特性をもつ本能によって行われる。こうして事物や現象に目的論が投入される。すると事物や現象に関する理解は、ありのままの事実在即した理解と人間行為に擬えられた転嫁に関わる理解となる。転嫁に関わる理解が事物や現象に転嫁されれば、事実在即した理解を歪めることになり、結果的に事実在即した知識の発展に悪影響を及ぼし、ついには物的福祉に関わる技術的知識の発展を鈍らせる。こうした事態は不可避的である。この矛盾した二重の理解は同一の事物と現象に同時に存在しているからである。

ヴェブレンによれば、原始未開段階では、根拠のない好奇心が製作本能に有効な情報を与える場合、事物や現象に対する事実在即した知識を促進させる。そして日々の生活や経験でその知識が認められると、事物や現象での二つの理解間での矛盾を避ける必要が出てくる。するとそこでは、事物の転嫁に関わる理解は次第にぼんやりとして薄れてゆく。だがそれは、薄れるだけでまったくな

くなるわけではなく、一步後退した形で事物の中に残り続ける。これは、製作本能が事物の不明瞭な部分を不明瞭な事柄としておくことはさけるべきであるとするからである。こうして不明瞭な部分は、再び擬人論的に解釈されることになり、擬人論的解釈はなおも事物の理解を導き続けることになる。これが精錬されて、神話が創造され、ついには一つの神が出現するまでになる。したがって、知識は神話体系の見地から組み立てられることになる。これが制度となり人間行為を規定するようになる。

だが、ヴェブレンによれば、観察された事実や現象は転嫁された事柄と同時に不明瞭で事実即した事柄が必然的に残存する。不明瞭で事実即した事柄は、純粋な製作本能が発現し、ありのままの事物や現象という観点から捉えられることになる。それゆえに、事物や現象がすべて転嫁に関わる理解ですべてを覆ってしまうことはない。事実即した領域が理解の中に必ず残される。

このように、製作本能は常に矛盾を発生させては統一へと向かうが、それと同時にさらに矛盾の発生を引き起こす。この過程の繰り返しとなる。この過程はすべて、製作本能がどのように発現するかによって展開する。

以上、『製作本能論』の第1章と2章の骨子をまとめるならばこのようになろう。ではここで、こうしたヴェブレンの本能論について何点か検討を加えてみたい。

まず、ヴェブレンの本能論は当時の生理学や心理学の批判的検討を通じて確立された彼独自の本能の概念であるといえるのではないか。ヴェブレンは、自然科学的に追究されるような向性にまで還元される生理学や心理学の研究成果をそのまま自己の分析に適用したのではなく、向性に関する研究を手懸りとして機能という観点から本能をまとめると、むしろ本能の目的論的性向を有した特定の明確な性癖があるのみであることを見出している。それゆえにこそヴェブレンは、『『本能』は、神経学的あるいは生理学的な概念ではない

し、神経学的あるいは生理学的用語で述べることはできない』（Veblen, 1914, 28, ft., 訳 32）と述べ、自己の想定する本能を自動反応を意味する「向性」から区別した。こうした本能概念に基づいてヴェブレンは制度を発生論的に研究する。それゆえヴェブレンにとって本能とは、生理学の分野におけるそれ以上分解できないような要素間の機械的な関係というものではなく、彼自身が独自に創り出した「分析概念」であるともいえないだろうか。このように理解すると、T. メイベリー（T. Mayberry）の次の所説は注目に値する。

注目しなければならない重要な点がある。ヴェブレンが、現代心理学が否定する本能が存在していると主張しているのではないことである。ヴェブレンは、文脈の中で、多くの場合、心理学を一般化しているのではない。それは製作本能を議論するどんな場合でもそうである。心理学者が論破することができない事柄を述べているのではない。実験上の事柄を述べているのでは毛頭ないからである。これは、ヴェブレンが分析的に述べていないといっているのではない。ヴェブレンはそのどちらも行っていない。行っているのは、概念的な枠組みを説明していることである。その枠組み内で、ヴェブレンは制度と社会変化を判断する（Mayberry, 1969, 318）¹⁰⁾。

さて、ヴェブレンが重視したのは、「製作本能」、「親の性癖」、「根拠のない好奇心」であった。これらの本能は同時発生したり汚染したりする。それは製作本能の純粋な発現および汚染としての発現において行われていた。この意味で、これらの本能の中で製作本能は、純粋な形態と汚染形態としての発現を通じて、他の二つの本能を体系的に関連づけ、かつ統一して機能させているといえるのではないか。というのも、本能の同時発生と汚染は、製作本能によって同時に行われているからである。佐々木（1998, 182）氏が「製作本能は他

の二つの本能〔親の性癖と根拠のない好奇心〕と内的連関を持ち、それらを統一する」と述べているのはこうした理由からではないか。

このように、製作本能の純粹形態と汚染形態の発現を通じて、本能的行為が実現されていく。しかもそれらの形態は、同時に発生していた。これは、認識過程における事実に即した理解と転嫁に関わる理解との矛盾を引き起こす過程として説明された。こうして再度、製作本能による調整、統一過程へと向かうが、それと同時に矛盾を発生させることになる。この矛盾はそもそも製作本能にあるために絶えず発生してくる。したがって製作本能は、その本来の機能および汚染形態としての機能を繰り返し発現することで制度形成を実現させているといえるのではないだろうか。

このようにみえてくると、ヴェブレンが文化の略奪段階で現れてくるとする略奪性向あるいは略奪本能は、製作本能の自己汚染を通じて現れてくる形態であり、したがってそれは製作本能それ自体の汚染形態であるといえるのではないか。こう捉えると、ヴェブレンが『有閑階級の理論』で次のように述べていることが理解できよう。

後者〔略奪的性向〕は、まさに製作本能が特殊に展開したもの、すなわち、変形したものであり、それは絶対的に古いものであるにもかかわらず相対的に最近のもので短命である……競争的で略奪的な衝動 (the emulative predatory impulse) は、本来、根本原理である製作本能と比べると、不安定である。競争的で略奪的な衝動は、その製作本能から展開して分化してきたものである (Veblen, [1899] 1965, 270, 小原訳 254 / 高沢 295-6)。

以上のように、ヴェブレンの本能論は製作本能によって一元的に組み立てられて展開されていると捉えることができるのではないか。こう理解することは、ヴェブレン自身が自己の経済学を「進化論的」経済学としたこととうまく重なるといえ

るのではないだろうか。つまり、矛盾を孕んだ製作本能が無目的論的に終わりのない過程として進化していくという、まさにヴェブレンが主張したダーウィン主義の「進化論的科学」の経済学が理解できるのではないか。このように、ヴェブレン経済学を製作本能の一元的理解に基づき捉えることは、新しいヴェブレン経済学像を切り開いていくことになるといえるのではないだろうか。この課題については今後検討していくことにしたい。

(日本大学大学院経済学研究科博士後期課程)

注

- 1) ヴェブレンのミッチェルへの影響については拙稿 (Takahashi, 2008) も参照されたい。
- 2) 詳しくは Gruchy (1974) を参照されたい。
- 3) エアーズは次のように述べている。「要するに、ヴェブレンが本能を考えるさい、そこにはたった二つの本能的性癖があるだけである。その二つの性癖はあらゆる文化の反対のものであり、背面である。

かくしてヴェブレンの本能の概念は、あらゆる彼の考え方の主たる前提である対立から切り離すことができない。そして、その概念を捨て去るさい、ヴェブレンの批判家は、同様に、現代に関するもっとも重要な社会の洞察を投げ捨てた。…事実上、彼らは、本能の概念が誤っているから、本能的であると考えた誰もが、同様に誤っていると想定した。しかし、少なくとも考えられることは、ヴェブレン流の対立は妥当であることと、ヴェブレンがそうした対照的で体外に無益にする人間行為に関する解釈を本能に帰したことのみ誤っていることである。もしわれわれがそのように想定するならば、われわれは、こうした人間行為のひじょうに不合理の二者択一の解釈が今や提供できるかどうか問うことができるのである。」 (Ayers, 1958, 29)

- 4) エアーズの「技術的行動」と「儀式的行動」については高橋真 (1991) を参照。
- 5) フォスターとブッシュが二分法を採用している

ことに関しては、高橋真 (2002, 107-23) を参照されたい。

- 6) 本稿における原書からの引用文に訳書からのページ数を挙げたさいにも、それは必ずしも訳書に従っているわけでない。この点、他の邦訳書すべてにおいて同様であることをここで断っておく。
- 7) ヴェブレン (1914, 18, 訳 16) はこれに関して次のように述べている。「どのような種族の生活史でも、考えられるのは、その〔人種的型の〕典型的な性質が変更されるということが、心的であろうが肉体的であろうが、起こることはないだろうということである。本能という典型的な人間の特性は、肉体的な点での種族の典型的な性質と同様に、この最近の見解に従えば、人類の始まりから変わることなく遺伝されてきている。
- 8) ここでヴェブレンの本能の名称・用語法について触れておきたい。1) ヴェブレンは、製作本能 (instinct of workmanship) を、製作の感覚 (sense of workmanship) や、製作の本能的感觉 (instinctive sense of workmanship)、あるいは単に、製作 (workmanship) と書く場合がある。これらすべて、製作本能と同様の意味を持つ。2) 親の性癖 (parental bent) は、親性本能 (parental instinct) と書く場合もあるが、ほとんどは親の性癖と記されている。ここでは、親の性癖が本能と書かれなくても本能であるということを確認しておきたい。3) ヴェブレンは、根拠のない好奇心 (idle curiosity) を、好奇本能 (instinct of curiosity) あるいは単に、好奇心 (curiosity) とも呼んでいる。根拠のない好奇心と呼ぶ場合でも、それが本能であることを確認しておきたい。
- 9) ヴェブレン (1914, 27-8, 訳 24) は次のように述べている。『『製作本能』あるいは『製作的感觉』という表現を用いるさい、本書では、そう呼ばれる性癖が心理学的な関連で単純なあるいは還元不可能な要素であると想定したり主張したりするつもりはない。ましてや、もちろんである

が、それがあある一つの独立した向性的感覚、あるいはあある一つの酵素や内臓の刺激にまで遡らなければならないと強く主要するつもりもまったくない。…当面の研究にとっては、人間行為にはこの性癖が不変的、遍在的、かつ弾力的なかたちで有効であるので、人間の文化について研究している者がそれを人類が有する欠くことのできない遺伝的特性の一つとしてみなさなければならぬだろう。」

- 10) 内田 (1983, 204) 氏も、このメイベリーの見解を取り上げているので、あわせて参照されたい。

参考文献

- 内田成 (1983) 「ソースタイン・ヴェブレンの本能論——『製作本能論』第1章「緒論」の検討を中心として——」日本大学経済学部経済科学研究所『紀要』第7号, pp. 185-205.
- 奥木巧 (1994) 「ヴェブレンの製作本能論の展開——制度の発生学的研究へのアプローチ——」佐々木晃編著 (1994) 『制度派経済学の展開』ミネルヴァ書房, pp. 68-94.
- 齋藤宏之 (2007) 「ソースタイン・ヴェブレンの製作本能の理論」『経済集志』76 (4), pp. 17-28.
- (2008) 「ソースタイン・ヴェブレンとウェズレー・ミッチェルの制度主義——本能論と行動主義をめぐって——」『経済集志』77 (4), pp. 129-139.
- 佐々木晃 (1967) 『経済学の方法論——ヴェブレンとマルクス——』東洋経済新報社.
- (1998) 『ソースタイン・ヴェブレン——制度主義の再評価——』ミネルヴァ書房.
- 佐々野謙治 (1982) 『アメリカ制度学派研究序説 ヴェブレンとミッチェル, コモンズ』創言社.
- (2003) 『ヴェブレンと制度派経済学 制度派経済学の復権を求めて』ナカニシヤ出版.
- (2007) 「ヴェブレンの経済学とミッチェル, コモンズ——ヴェブレンの継承者は誰か——」『エコノミクス』12 (1・2), pp. 1-32.
- (2008) 「エアーズとその後の制度派経済学

- 「ヴェブレンの継承者は誰か——」『エコノミクス』12 (3), pp. 1-17.
- 高橋真 (1991) 「エアーズの制度経済学」佐々木晃編著『制度派経済学』ミネルヴァ書房, pp. 247-270.
- (2002) 『制度主義の経済学——ホーリスティック・パラダイムの世界へ——』税務経理協会.
- 高橋宏幸 (2005) 「制度派経済学の成立背景——A. G. グルーチーの所説をめぐって——」『経世論集』(31), pp. 29-48.
- (2006) 「ヴェブレンのマーシャル批判——グルーチーの所説をめぐって——」『経世論集』(32), pp. 39-56.
- 塚本隆夫 (2001) 「ソースタイン・ヴェブレンの進化的経済学の継承——M. ラザフォードの所説にそって——」『経済集志』71 (3), pp. 273-292.
- Asso, P. F. and L. Fiorito (2004) "Human Nature and Economic Institutions: Instinct Psychology, Behaviorism, and the Development of American Institutionalism," *Journal of the History of Economic Thought*, 26 (4), pp. 445-477.
- Ayers, C. E. (1958) "Veblen's Theory of Instinct," in Douglas F. Dowd ed., (1958) *Thorstein Veblen: A Critical Reappraisal*, Cornell University Press, New York, pp. 25-37.
- Cordes, C. (2005) "Veblen's 'Instinct of Workmanship,' Its Cognitive Foundations, and Some implications for Economic Theory," *Journal of Economic Issues*, Vol. XXXIX, No. 1, pp. 1-20.
- Daugert, S. M. (1950) *The Philosophy of Thorstein Veblen*, King's Crown Press, Columbia University, New York.
- Dugger, W. M. (1988) "A Research Agenda for Institutional Economics," *Journal of Economic Issues*, 22 (4), pp.983-1002.
- (1995) "Veblenian Institutionalism: The Changing Concepts of Inquiry," *Journal of Economic Issues*, 29 (4), pp. 1013-27.
- Gruchy, A. G. ([1947] 1967) *Modern Economic Thought: The American Contribution*, Augustus M. Kelley Publishers, New York.
- (1968) "Institutional School," *International Encyclopedia of the Social Sciences*, The Macmillan Company & The Free Press, Vol. 4, pp. 462-467.
- (1974) *Contemporary Economic Thought: The Contribution of Neo-Institutional Economics*, Clifton, Augustus M. Kelley Publisher.
- Hamilton, W. H. (1919) "The Institutional Approach to Economic Theory," *The American Economic Review*, 9 (1), pp. 309-318.
- Hodgson, G. M. (1988) *Economics and Institutions: A Manifesto for a Modern Institutional Economics*, Polity Press [八木紀一郎, 橋本昭一, 家本博一, 中矢俊博訳 (1997) 『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会].
- (2004) *The Evolution of Institutional Economics: Agency, Structure and Darwinism in American Institutionalism*, Routledge London and New York.
- (2007a) "The Revival of Veblenian Institutional Economics," *Journal of Economic Issues*, Vol. XLI (2), pp. 325-340.
- (2007b) "Instinct and Habit Before Reason: Comparing the Views of John Dewey, Friedrich Hayek and Thorstein Veblen," in Krecke E, Krecke C, Koppl R. G. ed., (2007) *Cognition and Economics: Advances in Austrian Economics Volume 9*, Elsevier Ltd., pp. 109-143.
- Mayberry, T. (1969) "Thorstein Veblen on Human Nature," *American Journal of Economics and Sociology*, 28 (3), pp. 315-323.
- Rutherford, M. (1998) "Veblen's Evolutionary Programme: A Promise Unfulfilled," *Cambridge Journal of Economics*, 22 (4), pp. 463-477.
- (2000a) "Understanding Institutional Economics: 1918-1929," *Journal of the History of Economic Thought*, 22 (September), pp. 227-308.
- (2000b) "Institutionalism Between the Wars," *Journal of Economic Issues*, Vol. XXXIV (2), pp.

- 291-303.
- (2003) “American Institutional Economics in the Interwar Period,” in Warren J. Samuels, Jeff E. Biddle, John B. Davis ed. (2003) *A Companion to the History of Economic Thought*, Blackwell Publishing Ltd, pp. 360-376.
- Takahashi, H. (2008) “The Veblen's Influence on W. C. Mitchell,” *The Nihon University Economic Review*, 78 (3), pp. 199-209.
- Twomey, P. (1998) “Reviving Veblenian economic psychology,” *Cambridge Journal of Economics*, 22, pp. 433-448.
- Veblen, T. ([1898] 1998) “The Instinct of Workmanship and the Irsomeness of Labor,” in Veblen T. ([1934] 1998) *Essays In Our Changing Order*, Transaction Publisher, New Bruswick and London, pp. 78-96.
- ([1899] 1965) *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institution An Economic Study of Institution*, The Macmillan Company [小原敬士訳 (1961) 『有閑階級の理論』岩波書店, 高哲男訳 (1998) 『有閑階級の理論』筑摩書房].
- (1914) *The Instinct of Workmanship and the State of Industrial Arts*, New York, Macmillan. [松尾博訳 (1997) 『ヴェブレン 経済的文明論—職人技本能と産業技術の発展』ミネルヴァ書房].
- ([1918] 2003) *The Higher Learning in America*, Transaction Publisher, New Brunswick and London.
- ([1934] 1998) *Essays in Our Changing Order*, Transaction Publisher, New Brunswick and London.
- Waller, Jr, W. T. (1982) “The Evolution of the Veblenian Dichotomy: Veblen, Hamilton, Ayres, and Foster,” *Journal of Economic Issues*, 16 (3), pp.757-771.